

懐旧の情

長崎県松浦市 山本 脩

そう、もう50年にもなるんですね。

私は戦争中、中国は北京市の近く、保定市という所に住んでおりましたね。父が華北交通という鉄道会社に勤務していたこともあって、父母と私達兄弟3人で生活しておりました。

あ……そうそう、私達日本人達が暮らしている『お政荘』という団地がありました。高い塀があり塀の頂部には、ガラスの欠片を突き刺してあり、さらに鉄条網で囲ってあったように思えます。

私は国民学校初等科1年生（現小学1年）でした。

朝、学校に行くときは団地前の広場に集まり、下級生を先頭に行列を組み、兵隊さんが二・三人で前後を護衛してくれておりました。

『今日も学校に行けるのは、兵隊さんのお陰です。お国のために お国のために働いた兵隊さんのお陰です』と大声で歌いながら通学しておりました。

教室に入ると、正面には皇居と天皇・皇后両陛下の写真が掲げてあり、朝礼では総員起立の上、先生が「皇居に向かって最敬礼！！」と号令、全生徒深々と頭をさげ、その後で「兵隊さん、先生、皆さん、お早うございます」と挨拶です。

着席すると間もなく、鐘の乱打です。防空頭巾を被り、医薬品や乾パン等が入った片掛式のカバンをかけて外に飛び出します。運動場は蜂の巣のように防空壕が掘ってあり、すでに上級生がそれぞれの扉を開けて待っていて、私たち下級生はあらかじめ指定されている防空壕の中に入って行きます。いわゆる避難訓練です。体育の時間はもっぱら手旗信号の練習、おかげで1年生ながら少し手旗信号を読みとることができて、今でも覚えています。もちろん国語や算数、音楽の授業も受けました。

国民学校初等科に入学したのが昭和20年4月ですから、戦況はかなり厳しくなって来ていたころでしょうが、幼少の私にとってそのころの国内外の情勢がどうなっていたのか知る由もありませんが、大変険悪な状況になっていたことと思います。

ある夜の事です。私たち日本人街に向けての襲撃が始まりました。八路軍の攻撃です。ちょうど父は夜勤のため留守でした。母は私と妹、それに生後間もない弟を連れて家の裏にあったセメント倉庫の中に隠れました。中国の家は、木と高粱の茎等を骨組みとして、それを土で被った作りが主流ですので、燃えにくかったのでしょう。火炎は発生しませんでした。瓦や窓ガラスの割れる音、閃光により時々倉庫内の積荷の様子が伺えます。

どのくらいの時間が過ぎたのでしょうか。窓の外がうっすらと白けて来た頃でした。いつの間にか静かになっていて、隣近所の人達が私たち家族を探している気配に恐る恐る外に出て行きました。外壁には昨夜のおびただしい弾丸の跡が無数に残っていたのを覚えています。ただ、

その事件が原因かどうかわかりませんが、妹が死亡しました。高く積まれた木材の上に載せて、茶毘に付したのです。遺骨は日本に帰るまでと言うことで、中国のお寺に預けました。

ある日、父が勤務から帰って来るなり「今日から外出してはいけない。大事な物をまとめていつでも日本に帰られる準備をしておくように」と言って、お手伝いとして住み込んでいたカイさんという中国青年と家のかたづけを始めました。

きっとその時が日本が戦争に負けた日だったのでしょう。

引揚げの準備のため、母は近所の人達と布地を持ち寄り、それを縫い合わせて広い布を作っていました。その事については、後でお話しましょう。

みなさんは日本が戦争に負けて進駐軍に占領されていた頃、彼等が鉄道を利用する時は特等車とか言って今のグリーン車に乗って旅行していたのをご存じありませんか。当時日本人は列車の窓や屋根、手すり、果てには機関車にも鈴なりにぶらさがって買い出しなどに走り回っていましたが、その側を特等車に乗った進駐軍の列車が雄々と通り過ぎて行くのをうらやましく眺めていたものですが、まさに私たち日本人も中国ではこのような状態であったろうと思います。

敗戦となり華北の各地に散らばっている日本人は、北京に集結させられたのですが、その折の輸送車が無蓋貨車でした。その時に役に立ったのが、先にお話した母たちが作ったあの広い布だったのです。あれを木で棧を作りテント代りに覆って、日除けとしたのです。これが引揚げの始まりです。途中、鉄道のあちこちに転覆した機関車や列車が横たわっていました。鉄道爆破によるものです。

保定市から北京市までの距離がどれ程か知りませんが、今だと1日もかからないと思うんですが、引揚列車は各駅に長時間停車したり、中国兵による立ち入り検査等でなかなか北京までたどり着きません。

引揚列車に乗って二日目の夜だったのでしょうか。ある駅に停車中のホームから「山本先生（シャンペンセンション）山本先生」と大声で叫んでいる人がいます。聞き覚えのある声です。テントを押し揚げて、声のする方をみると、まさしく長い間一緒に暮らしてきた、あのカイ青年です。「オーイ」と大声で答えると私たちの方に走って来ます。手には四角の箱をさげげいます。それは先に中国寺に預けていた妹の遺骨だったのです。

敗戦以来、日本人街からの外出が制限され、外部との連絡もままならず、妹の遺骨と一緒に帰れないのが心残りだと父母は悔やんでおりましたのに、カイ青年のお陰で一緒に帰れるのです。今のように自動車もない時代です。そこが何と言う駅であったのかわかりませんが、保定市から、はたして何kmの道程だったのでしょうか。馬車にでも乗って来たのでしょうか。それとも歩いて来たのでしょうか。今となっては何もわかりません。

あれから北京市内に収容されていましたが、明けて昭和21年5月中国の大沽港を出港、佐世保市の浦頭港に着岸しました。私の胸に妹の遺骨をしっかりと抱いての上陸です。そこで一人一人の所持品検査を受け、ここを通過すると今度は頭から足の先までDDTを振り掛けられ

全員真白になりました。

それから女や子供はトラックで、男たちは大きなリュックを背負って徒歩で針尾海兵団宿舎へ入り、ここで日本での第一夜を明かしたのです。ここには現在ハウステンボスが立地し、当時の面影はありません。

針尾海兵団の近く、国鉄南風崎駅からそれぞれの故郷に向かって分散して行きましたが、引揚げの無理が祟ってか、母は間もなく病に倒れ亡くなりましたが、カイ青年のお陰で妹のそばで静かに眠っています。

カイ青年は今でもお元気でしょうか。はるか広大な中国大陸を懐かしく、偲んでいます。たとえ国と国とでは、憎しみ合い、争い合っている、人は人としての強い絆で結ばれているのです。